灯籠流し

東條　眞理子

祭りのあとの寂しさを語る文章や歌詞は、挙げればきりがない。ここ徳島と言えば阿波踊り、四日間にもわたる大音量のカネと太鼓が響く中の激しい踊りのあとの静けさは、格別だ。常ならば、人口二五万にも足りない地方都市徳島市が、年に四日間だけ数十万人の観光客であふれかえるのだ。とは言え、その喧騒は市内のごく狭い範囲の主に商業地に限られていて、徳島市民であっても、阿波踊りを一度も踊ったこともなければ見物すらしたこともないという人も珍しくない。

その中にあって、瀬戸内寂聴先生は阿波踊りをこよなく愛した。なんと言っても先生は、誕生の地も、通った幼稚園も小学校も街中の中心部にあり、阿波踊りのぞめきの中で生れ育ったと言っても過言ではない。そんな先生の号令の下、寂聴塾生は寂聴連を結成、揃いの浴衣や法被をあつらえて阿波踊りに繰り出したものだ。最初の浴衣は、塾生のＩ君によるデザイン、二枚目と三枚目の浴衣は、先生との親交も深い横尾忠則さんによる斬新なものであり、塾生の誇りでもあった。

あふれかえる人々の渦の中、大きな拍手と声援を浴びて、ゆるやかに笑顔で踊る先生の姿が、八月が来る度に鮮やかに蘇える。

なかでも忘れ難い阿波踊りがある。

一九八八年、瀬戸内先生の招待を受けて、井上光晴先生御夫妻が、初めてで最後になる阿波踊りを訪れた。当時、

私は阿波文学伝習所の事務局をしており、御夫妻の御世話をすべく、その実、只うろうろと後ろをついて歩いていたのだった。

井上先生はこの年から四年後の一九九二年に病を得て亡くなるのだが、八八年時には病の兆候も無く元気一杯で阿波踊りを全身で楽しまれていた。当時の徳島新聞社のインタビューに答えて「すごい。世界各国の祭りを見たけど、まさに祭りの中の祭りだね。思想を超えた、阿波の歴史を物語る、庶民のバイタリティーそのものだ。」と、語っている。踊りの待ち時間と言えば、暑いし、長いしでうんざりするものだけれど、井上先生はこう言う。「演舞場に踊り込むまでの待ってる間がいい。それぞれのグループや子供たちが練習してる。浮き浮きしてくる。」井上先生の言葉ひとつで、あの長くてうっとうしい待ち時間がかけがえのないものに思えてきたものだ。

阿波踊りには男踊りと女踊りの二つの踊り方があり、女はどちらか好きな装束を選んでそれに応じた踊りをするのだが、男は男装束で男踊りだけをするのが普通である。その他に、寂聴連には唯一無二の僧衣で踊る瀬戸内先生踊りという第三の型がある。その特別性を羨んだ井上先生は「僕は女装して女踊りを踊りますよ、瀬戸内さんより目立つにはそれしかないでしょう」と言い張って皆を笑わせ、結局、不承不承男踊りを踊ったのだ。いつもどおり、大きな声で大騒ぎを楽しむ井上先生の傍らで、瀬戸内先生と郁子夫人は、困った人ねというように、にこやかに目を合わせていた。郁子夫人は、井上先生とは正反対に、寡黙で凛とした佇いの、美しい人だった。

約三〇年の後、この時の三人の「特別な関係」が、「あちらにいる鬼」という作品になって表わされるなどということは、想像もできないままに八八年の阿波踊りの夜は更けていった。「あちらにいる鬼」は、井上先生の長女である井上荒野さんによる小説である。その単行本の帯には「作者の父井上光晴と私の不倫が始まった時、作者は五歳だった」という衝撃的なキャッチコピーが、瀬戸内先生によって書かれた。古今東西を見渡しても類の無い帯の文章であり、今後も書かれることがあるとは思えない。瀬戸内先生は、潔い。

今年も私は踊りのぞめきを遠くに聞きながら、見に行くことはしない。踊ることももうない。阿波踊り閉幕翌日の夜、新町川を流れてゆく無数の灯籠を、只見続けるばかりだ。